

古河に受け継がれる 疫病との戦い

アマビエだけじゃない！ 人びとに信心された幻獣たち

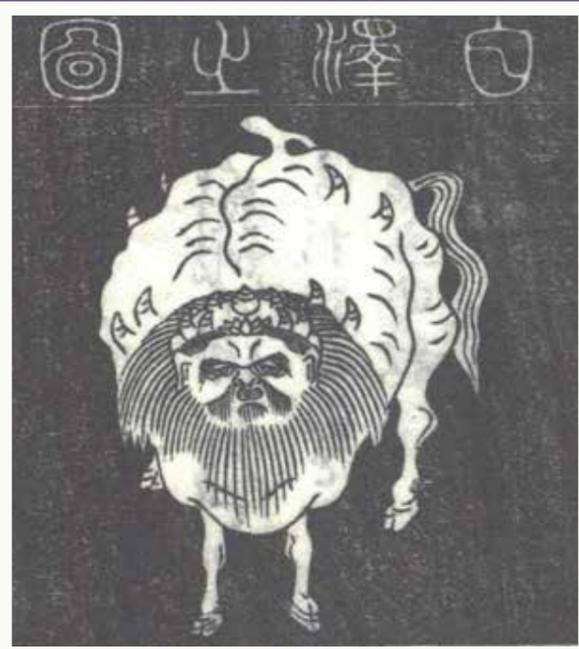
一心の拠り所となる幻獣たち

厚生労働省の感染予防の啓発キャラクターにもなっているアマビエ。実は、江戸時代からたくさんのお祭りが各地で生まれていました。

世の中が不穏になると各地に現れたという人の顔を牛「件」、長崎では「姫魚」、富山では「クタベ」、山梨では「ヨゲンノトリ」など、世相を予言し、疫病退散や豊作を約束した幻獣たちです。

白澤もその一つ。もともとは中国古代の霊獣でしたが、日本ではこの絵を持っていくと、山海の災難と病魔から身を守り、旅の安全を願うものとされてきました。

そこから流行病除けに派生し、1858(安政5)年にまん延した、いわゆる安政コレラ流行のときには、この絵を枕に添えて寝ると、悪い夢を見ずに邪気を避け、コレラにかからないとされたのでした。



▲白澤『旅行用心集』(古河歴史博物館所蔵)



▲アマビエ『肥後国海中の怪』(京都大学附属図書館所蔵)



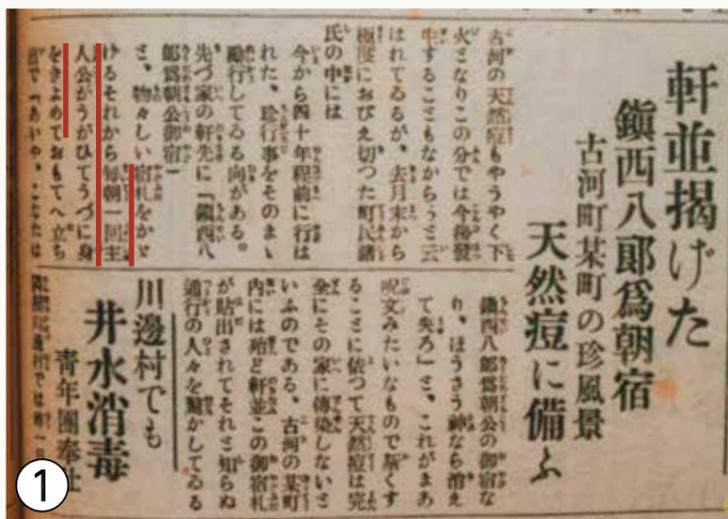
▲クタベ(富山県立山博物館所蔵)



▲ヨゲンノトリ(山梨県立博物館所蔵)



流行病を取めたのは 神頼みと手洗いうがい!?



1939(昭和14)年6~7月は、チフス・はしか・赤痢・天然痘などの流行病が、古河地方の人たちを悩ませました。

当時の新聞記事を見ると、天然痘の予防接種である種痘や手洗いうがいを奨励する一方で、天然痘除けのまじないとして「鎮西八郎為朝公御宿」と書いた宿札を掲げた家が、古河の至る所で見られていたことが分かります。

これは、平安時代の武将である源為朝が、八丈島の痘瘡神を抑え込んだことに由来しています。江戸時代以降、天然痘が流行するたび、各地でこのような宿札を掲げたとされています。

古河歴史博物館 / 館長
立石尚之さん

釣船清次や佐々良三八の宿札もありました。痘瘡神は困っているところを彼らに助けられた恩を感じ、この宿札がある家を感じ、この宿札を守ってくれたそうですよ



疫病退散！ 今に受け継がれる伝統文化



1927(昭和2)年は、近年にないチフスの大流行となった年であったようです。5月に近隣の村で発生し、6月になると古河でも毎日のように感染者が出ました。

神仏に頼る人も多く、集落の中央に神輿を持ち出して毎日祈願をしたり、入り口にしめ縄を張ったりする村もありました。

かつて、古河公方足利成氏によって始められたと伝承される悪戸新田獅子舞は、このとき病魔退散の期待を受けて、長い中断期間を経て、復活を遂げたのでした。

POINT

悪戸新田は、現在の古河ゴルフリンクス周辺にあった地域。そこに住んでいた人は、渡良瀬川の改修により市内各地に移転しました。

市民の絆を深めるためにも、古河に息づく郷土の文化をこれからも引き継いでいきたいと思っています

悪戸新田獅子舞保存会 / 会長
橋本賢一さん



- ① 赤線部に「毎朝1回うがいをして身を清める」と書かれている
- ② 為朝大明神・だるま赤色は厄を払うとされ縁起物として人気があった(国立歴史民俗博物館所蔵)

